
キス魔と指フェチの百合日記。

ももか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キス魔と指フェチの百合日記。

【Nコード】

N8969U

【作者名】

ももか

【あらすじ】

あたし、木下あんずは指フェチなの。素敵な指を見ると、触りたくて舐めちゃいたくなっちゃって……ノノノでも！ そんな変態じみた私にも恋人ができました！ 私の愛しい『彼女』がね。変態、レズ、エロエロ星人……もうなんとも言えばいいじゃない。こんなあたしとあたしの彼女である由良ちゃんがくりひろげる、ちよっとエッチな胸キュン純愛ストーリー……の予定……！！

はじまりはその指でした。

はわわ……／＼／

「いい？ ここはXに8を代入して……」

今あたしは数学のお勉強中。

ただどね、数式を指差すその白くてすらつとした指があまりにも素敵で……説明なんて聞こえません！

だってさ、こんなにも素敵な指を目の前でちらつかせるなんて。

絶対に確信犯だよね、この子！

「ね、聞いている？」

「ふえっ！」

いかんいかん。ここはまず勉強に集中しなくては！

「ごめんごめん、ちゃんと聞いているよ？」

でもね、由良^{ユラ}ちゃん。君のせいで集中できないんだってば！

「あっ！ ほら、ここも間違ってるじゃん」

だから指差さないでってば！ そんな指近づけたら……もう……

我慢できないに決まってんじゃない！！

ぎゅっ

「ん？」

はっ！ やってしまった。やってしまったよ。

あまりにも素敵な指だから、つい……握ってしまった！

由良ちゃん、お願いだからそんな目で私を見ないで……

「どうした？ いきなり人の指つかんで」
由良ちゃんはそうやって軽く笑い飛ばすけどね、
なんて言い訳したらいいの！

「な、なんでもない…です／＼」

あたしのバカ。

いま絶対、顔赤いつて！

普通に「あはは〜なんとなく？」とか言えばいいじゃんか！！！

「あんず……？」

由良ちゃんが真っ赤に火照ったあたしの顔をのぞきこむ。

まるでお人形さんみたいにキレイな顔立ちをしていて、そのくり
つとした大きな瞳はしっかりとあたしを捕らえた。

「……／＼」

そんなことされたらいくら女のあたしだって照れちゃうに決まっ
てる。

「なんかあるなら言ってみ？」

由良ちゃんは大事なお友達だから、隠し事はしたくないんだ。だ
けどね、それとこれとは別のはなし。本当のことといったら由良ちゃ
んに嫌われちゃうかもしれない。

それだけは絶対にイヤだもん。

「なんでもない」

「あんず……大丈夫、言ってごらん？」

由良ちゃんはずるい。

そうやって優しい声で、優しい顔で言えばあたしが逆らえないっ
て知っててやってるんだもん。

「あ、あたし！ じ、実は……ゆ………」

「ゆ？」

もう、どうにでもなれっ！

「指フエチなの！」

ああ、言ってしまった。

終わった……わたしの青春。私たちの友情……。

「ふーん、そっか」

えっ……なんか、反応うすくない??

てか、あれ？ こんな変態宣言してるのに引かないの？

「で？」

え、いや。で？ って言われても。

「あの、あたしのこと嫌いにならないの？」

「はあ？ なんで嫌いになるのよ」

あきれたようにあたしを見つめる由良ちゃん。

「由良ちゃん、大好きっ！」

なんていい友達をもったんだ、わたしはっ！

変態宣言をしてもなお、あたしと友達でいてくれるなんて……

でも、現実はそのなにごくなかった。

だって、次の瞬間にはもう、あたしの唇にやわらかい感触があったんですもの。

「でもないからね」

由良ちゃんはたまにあたしの心を読んだかのようにものを言う。でもここまでできたら本当にエスパーなんじゃないかって思えてくるんだけど。

つて、今はそんなこと言ってる場合じゃない！

だって、由良ちゃんが女の子なんだとしたら……………

「なんで、ちゅーしたの??」

「したかったら」

由良ちゃんはそう言うてにかつと歯をむいて笑う。

静かにかきあげた長い黒髪が寂しげにはらりと落ちた。

「あたし、ファーストキスだったんだよ…………?」

べつに由良ちゃんが嫌いなんじゃない。むしろ、好きだよ。

だけどね、人生に一度しかないファーストキスと女の子に奪われちゃうのはね、ちょっと。

あたしだって彼氏ができたらデートして、別れ際にちゅってされたいなあーなんてささやかな妄想を抱いてたんだよ?

「指フエチ。」

ふえ?

いきなり何?

「純粹で無邪気な愛されキャラのあんたが、そんな変態だったなんて知ったら…………みんななんて思うかな?」

うう…………。

これは何ですか。脅しですか。

今わたし、友達に脅されています。

「あたしは、どうしたらいいの?」

「あんたのくちびる、あたしにちょうだい」

わわわわ………… 由良ちゃんのが変態じゃなかっ!

「キスさせてよ」

「そんなの、彼氏つくっていちゃいちゃしてればいいじゃんか！」

「その代わり……」

由良ちゃんはまたもや怪しげに口元をきゅっと吊り上げた。

「な、なによ。なに言われてもイヤなものはイヤなんだからねっ！」

「あたしの指は、あんたのもの」

「……了解イタシマシタ。」

「こうしてあたしたちのちょっと可笑しい関係は始まったのです。」

イケメンと呼び出しメール

昨日はつい了解しちゃったけど、こういう関係ってどうなんだろう？

あんな素敵な指があたしのものになるなんて、夢みたいに嬉しい。でもね、あたし……正直キスって苦手なんだよ。口と口が触れ合うんだよ！ 柔らかいもの同士が触れ合うのってなんか苦手。

だからね、ドラマのキスシーンとか見てもなんであんなことするんだろう？ くらいにしかなってなかったんだ。

だけど、だけどね！

昨日の由良ちゃんとは……イヤじゃなかったかも。

んーでもやっぱり抵抗が……

「……た」

これからまたキスすることになるだろうし……

「……した」

だから、やっぱり慣れなくちゃいけないのかな。でもさ……

「木下！」

「え？」

いきなり大声で叫ぶなんて近所迷惑……って、

「篠原っ！……先生」

げっ！ そういや今って授業中だった？？

でもね、先生。あたしは今それどころじゃないんだってば！

「この問題といてみる」

勝ち誇ったようにニヤリと篠原は口元を吊り上げる。

どうでもいいけど、篠原はムダにカッコいい顔をしている。新任

教師なんだけど、そのルックスのおかげで先生・生徒ともに彼には一目おいてみるみたい。

あたしは”先生と生徒の禁断ラブ”みたいなものには興味ないけどね

「はい」

この問題をとけばいいんですよ。篠原のやつ、絶対あたしには無理だと思ってる。

でもね、あたしはやればできる女よ！

チヨークを片手に黒板の数式をにらみつける。

「……」

こ、これはっ……！

ラスボス級じゃないかつ！ うん、前言撤回。

「分かりません」

せめていさぎよく負けを認めよう。

「放課後、学習室な」

「イヤです」

「じゃあ、次のテストで100で……」

「分かりました！」

あたしが席に戻ったとき、ちょうどポケットの中で携帯が震えた。

メールだ。誰からだろ？

先生の目を盗んで、こっそりメールを確認。

差出人は由良ちゃんだった。

「今すぐ屋上に来て」

……なんで？

てか今授業中じゃん。

「休み時間でもいい？」

そう返信して再びポケットに携帯をしまっ。

だって、あたしただでさえ馬鹿なのに授業サボるなんてしたら、

通信簿に恐ろしい数字が並んじゃうもん。

何事もなかったかのようにペンを握ると、またまた携帯が震えた。

やっぱりメールは由良ちゃんからなんだけど、そのメールには何も書かれていない。

かわりにあったのは写メだけ。

そう、ただの写メ……じゃないでしょ、これはああああ！

あたしの携帯の画面には………なんと由良ちゃんの超素敵な指がっ！

「先生、具合が悪いので保健室に行つてきますっ！」

あたしは携帯を握り締めて教室を飛び出した。

「こら、待て！ 木下！」

そんな篠原の声が聞こえた気もするけど、気にしない。

欲望には勝てません！

勢いよく屋上の扉を開ける。

「由良ちゃんっ！」

シーン……

「由良ちゃん？」

シーン……

あ、あれ？ いないのかな。

そう思つて屋上をぐるりと見渡す。

「いたっ！」

すみっここに寝転がってる由良ちゃんを発見。

寝てるのかな。

起こさないようにそうつと近づく。

すやすやと寝息を立てる由良ちゃんの寝顔はすごく、きれいだった。

でもでも、もっと素敵なのはその指！ 屋上に来たんだもん、ちよつとくらい……いいよね？

「失礼しまあゝす」

そつと指に触れた瞬間。

あたしの視界は反転した。

えーっと、一つ質問してもいいでしょうか。

あたしはなぜ、由良ちゃんに押し倒されているのでしょうか。

イケメンと呼び出しメール（後書き）

さっそくお気に入りにしてくれた方、本当にありがとうございます。
これからも頑張るので、楽しんでいただけると嬉しいです。

感想・アドバイス・リクエスト等々、いただけましたら泣いて喜びますっ！

キス魔…いや、悪魔でした。

屋上に小さな風がふいた。
ふわりと舞うふたつのスカート。

「ゆ、由良ちゃ……んむっ」

あたしが言い終える前に、由良ちゃんの唇によってあたしの口はふさがれた。

「んっ!？」

カリッと唇を噛まれる。いきなりの痛み思わず小さく口をひらいた。

すると待っていましたと言わんばかりに、舌がねじ込まれる。

こ、これはべるちゅー……いわゆるDキスってヤツですかっ！

「ん、ふんっ……んー」

初めての感覚になんだか不安になって、どうにか引き離そうと由良ちゃんの肩を押す。

すると案外簡単に唇から温かい感触が消えた。

あたしたちの唇の間には名残惜しそうに銀色の糸がひいている。

うわっ、なんかこれ恥ずかしいかも。

由良ちゃんは制服の袖で口元を拭うと口を開いた。

「イヤだった？」

なんで、そんなに悲しそうな目をするの。そんな顔されたらイヤだなんて言えるわけないじゃん。あたし、やっぱり由良ちゃんに弱すぎでしょっ！

「イヤじゃ、なかったよ。でも、やっぱり慣れないし……」

「あたしが女だから？」

え？ 由良ちゃんはさっきよりもっと悲しそうな目であたしを見つめる。その声色もすごく弱弱しくて、心が痛い。

由良ちゃんを悲しませたのはあたしだって、分かってるから。

「ごめんね、でも由良ちゃんは大事な友達だし、えっと……」
傷つけたくなくて、そう言った。

「友達、か……。あたしが男だったら、あんずは付き合ってくれた？」

「だけど、由良ちゃんはもつともつと悲しそうな顔になっていく。」

由良ちゃんが男だったら。そんなこと考えたことなかった。でも、あたしは今すごく由良ちゃんが大切だ。だから、きつと……

「うん」

由良ちゃんが男でも、好きになってたと思う。付き合ってたと思うな。

「女のあたしじゃ、だめ？ あたしの彼女になってよ」

あまりにも切ない声でそう言うから、

「ん」

あたしは無意識にうなずいていた。

「んふふっ」

え？

いま、このしんみりとした状況には明らかに場違いな笑い声があった。

そして、ここにいるのはあたしと、にやりとお得意の悪魔の笑みを浮かべた由良ちゃん……で、え？

ええええええ！！

「ゆ、由良ちゃん？」

ま、まさか……

「付き合ってくれてるんでしょ？」

「にっこり笑顔の由良ちゃん。」

「だ、だましたの……？」

「騙されるほうが悪いと思わない？」

由良ちゃんは、悪魔でした。とんでもない悪魔でした。

これ百合小説だからあ！

木下あんず 16歳、女の子から「絶対に惚れさせる」宣言をされました。

忘れたいのには、頭からはなれてくれないのは由良ちゃんの魔法かなんかでしょうか。

そう、きつと悪魔の魔法だっ！

なーんて、いろいろ考えてたらあつという間に放課のチャイムが聞こえてきた。

それと同時に携帯がふるえた。

まあ予想はしてたけど、由良ちゃんからメール。

『今日是一緒にかえろ いつものとこで待ってるね』

そんなまるでカレカノみたいな甘いメールが来たわけですよ。でもあたしには

『今日是一緒に帰ってやるから今すぐ来いよ』

なんていう恐ろしい文に見える。はあ、こりや重症だ。

仕方がない、行ってあげようかな。いつものとこって屋上のことだしよ、きつと。

あたしがスクールバックに腕を通したときだった。

あーあー

スピーカーから聞こえた声、このムダにカッコいい声……これ篠原でしょ。

木下あんず。今すぐ学習室に来るように。

げっ！ そっぴや、今日そんなこと言われてた気もする。最悪だ。

てか、放送で話すだけで黄色い歓声があがるって……。そこでキ

ヤーキヤー言ってる子たちと代わってあげたい。憧れの先生と居残りとかいいシチュエーションじゃん、なんて。って、それよりもまず……

「由良ちゃんにメールしなくちゃ」

きつと放送聞こえただろうけど、一応ね。待たせちゃ悪いし。

『ごめんね>> 今日いのこりで遅くなっちゃうから先に帰っててよしっ！送信完了っつと。』

とりあえず、学習室だ！

と、まあ来てみたものの、篠原と二人っきりで勉強だと思つと気が重い。

やっぱり、忘れてたことにして帰ろうかな。うん、名案じゃん！そう思ってくるりと体を反転させたときだった。

「うわっ」

何かにぶつかった。だれ？ おそろおそろ顔を上げると……げっ！ 篠原じゃん。

「どうした、木下」

こうやって見ると篠原は背が高い。あたしの頭のところに胸があるんだもん。

「いや、なんでもないです」

「そうか」

篠原はそう言つと学習室の扉に手をかけた。

うわっ／＼／ コイツ、なにげにいい指してんじゃん。由良ちゃんとは明らかに違うんだけど、男の人特有の骨とか血管とか…正直ちよつと惹かれる。

思わずガン見してたら「どうした？」なんて言われて、あたしはしぶしぶ席に着いた。

「じゃあ、これやって」

どさつと目の前に置かれたプリントたち。ざつと10枚はある気

がするんだけど。

「はい」

シャーペンを握ったはいいけど、最初からさっぱり分からない。「分からないのか？」

あきれたように聞くけどさ、仕方ないじゃん。分かんないんだもん。

「はい」

「どれ。ここはだな、この公式を……」

わわっ／＼／ 指！ 指、近くないですか？？ なにこの状況。

そついや前にもこんなことがあったような……。でも、今回は理性に負けたりなんかしないもん。

そつ、絶対に……うっ……うっ……やっぱり、無理かも。

ぎゅっ

あーほらほら。この前とまったく同じパターン。ついにやってしまったよ。

「なっ！ お前、誘ってんのか？」

ニヤリと微笑む篠原。いやいやいや、断じてそんなことはありません！ 何が悲しくてあんたを誘わなくちゃいけないのよ。

「ちがいます／＼／」

「じゃあ、この指はなんなんだ？」

篠原が指差す先には、しっかりとヤツの人差し指を握るあたしの手が！

「わわっ、す、すみません」

急いで手を引っ込める。

うわあー、何やってんだあたし。にしても、やっぱり男の人の指って握り心地いいな……。

「俺の指、好きなの？」

いきなり言い当てられて、ふるふると首を横に振るので精一杯だ

った。

すると、篠原はいきなりふつと笑って「可愛いやつ」って。え……

「んむっ」

いきなり唇をふさがれる。

でもそれはキスみたいなやわらかい感触じゃなくて、もつと固くてあたしの大好きなもの。そう、いきなりあたしの口に突っ込まれたのは篠原の指だった。

「どう？ おいしい？」

ひとを馬鹿にしたような目で言われて、ほんとにむかつく。だけど、指を啜えさせられた今、あたしはあまりにも無力だった。

抵抗しようとしても力が入らない。

「んっ…ふぁ…んん」

その指を舌にからめたり、その指でっつと歯茎をなぞったり。

考えるだけでどきどきする。そして何より、篠原は上手い。焦らしたり攻めたり、不覚にもすごく気持ちいいなんて思っちゃった。

「んっ…んぁ…ふぁ…」

「すっげーエロい」

そういつてまた焦らし始めたかと思うと、篠原はそつと指を抜いた。

「ふえ？」

予想もしないタイミングでやめられて思わずまぬけな声を出してしまった。

「何？ まだ足りないの？」

篠原はまた意地悪に笑うと、さっきの人差し指をあたしに向けた。あたしの唾液で汚れてしまった指を見てるとなんだか恥ずかしくなる。少しうつむいたとき、篠原が口を開いた。

「あんずちゃん、彼氏とかいるの？」

とつさな質問にびっくりしながらも、あたしは首を横にふった。

でもふとあたまをよぎったのは由良ちゃんの顔。

「でも、彼女なら……」

はっ！ しまった！！ なんて言っちゃったんだろう。それにあ
たし、まだ彼女だって認めたくわけじゃないしね！

「ふーん、指フェチでさらにレズ……ねえ」

「わ、悪いですか。てかまだレズじゃないです」

どンドン指を近づけてくる篠原に耐え切れずにふいつと視線をそ
らす。

「まだってことはこれからレズになるってこと？」

「ちがつ……ん」

また口に入ってこようとす篠原の指をあたしは必死に拒んだ。

「なに？ 彼女がいるから我慢するの？ ふーん、面白いじゃん」

そう言っ篠原は意地悪な笑顔をつくと教室をあとにした。去
り際に「また舐めたくなったらいつでもおいで」なんて言っつたの
は聞こえなかったことにしよう。

いろいろあつて頭がついていかない。

だけど今、ひとつだけ言えるのは「由良ちゃんに会いたい」って
こと。

なんでか分かんないけど、会いたいって思っただ。

由良ちゃん……

変態悪魔でも愛しいんです！

由良ちゃんに会いたくて、階段をのぼる。

自分で先に帰っててなんて言ったんだから、屋上に行ってもいるはずなのに。だけど、なんでかな。由良ちゃんは屋上にいるような気がしたの。

階段を上りきって、真っ先に屋上のドアに手を伸ばした。

「由良ちゃん……」
いた。

いつものところに。屋上の隅っこは由良ちゃんの定位置なのかもしれない。

「待ってたよ」

由良ちゃんはそう言うとおあたしのほづに近づいてくる。

てつきりキスされるんだと思った。けれども由良ちゃんはただ優しくあたしを抱きしめる。

「由良…ちゃん……」

あたしがそう言ったとき、「何も言わなくていい」とでも言うように由良ちゃんはあたしの口をふさいだ。

それは触れるだけの、とても優しいキス。

キスなんてイヤだって、ましてや女の子どうしなんてって、そう思ってたのに今はただ由良ちゃんに甘えたい。

そつと由良ちゃんの唇がはなれた。

「いつもとちがう味がする」

由良ちゃんはそう言って悲しげに目を細めた。

「ごめんね、篠原の指……舐めちゃった」

言いたくなかったけど、言わなくちゃいけない気がしたんだ。あたしだって隠し事されたらイヤだもん。

「なんで謝るの？」

「だって、由良ちゃんはあたしの彼女……でしょ／＼／」

篠原が急にあんなことするから、由良ちゃんが急に優しくするから、あたしまでおかしくなっちゃったのかもしれない。

だからこんなこと、言っちゃうのかもしれない。

「あんず……今なんて？ もう一回！」

めずらしく目をキラキラさせて言うんだもん。だけど、そんな恥ずかしいこと何度も言えるわけないじゃん。

「もう言わないもん」

そう言ってくすつと笑うと、由良ちゃんはパアッと顔を輝かせた。そして一言。

「消毒！」

「え？」

そう聞き返すために開いた口には由良ちゃんの指がねじこまれた。あたしの口の中で無邪気に遊ぶその指がすごく愛しかった。篠原みたいになまぬかないけど、これがあたしにお似合いなのかな。

それにしても、やっぱり由良ちゃんの指は最高だよ！ このすべての肌といい、いい感じの骨とか柔らかさとか。

由良ちゃんの味がする。なーんてね

「…………ふあ……ん……」

遊びまわる指は予想もしない動きをする。そのせいもあってか、たまにすごく気持ちよかったりするんだ。

「ふあ……あ……んっつ！」

思わずうめいてしまったのは、首筋に鈍い痛みが走ったから。そして、由良ちゃんがそこに口づけしたとたんにチクツと痛みを感じた。

なんだろうと不思議に思っていると由良ちゃんが口を開く。

「あなたはあたしものだからね」

そう言つと由良ちゃんはあたしのおでこにちゅつとキスを落としました。

しばらくイチャイチャしてたわけだけど……あたしが家に帰ってお風呂に入ったときのこと。

ふと鏡をのぞくと首筋に無数の赤い痕が。

これって、これって……

「き、キスマークっ!?!」

あわててスポンジでこすっても消えることはなく、由良ちゃんのそれはもう楽しいげな悪魔の笑みが脳裏に浮かんだ。

「由良ちゃんなんてやっぱり嫌いだった！　こんなじゃ外歩けないじゃんバカあ!?!?!」

あたし、やっぱり前言撤回します。

やっぱりあの悪魔、彼女だなんて認めてあげないんだからっ!!

少しでもあの変態にときめいた私がバカだった！

神様、あたしはこれからもあの変態悪魔に振りまわされるのでし
ようか……

変態悪魔でも愛しいんです！（後書き）

呼んでくださった皆さん、本当にありがとうございました

それからお気に入りにしてくれた方、ありがとうございましたっ！

これからもよろしくおねがいますっく

真のエロエロ星人！？

「どーしよっ！ これじゃ見えちゃう……！」

あたし、今すぐく困っています。

由良ちゃんにつけられた大量のキスマークが、制服を着ても見えちゃうんだもん。

絶対みんなに変な目で見られるって！

絆創膏でもはろうか。なんて思ったけど、首に何枚も貼ってちゃ別の意味で誤解されかねない。

「もうっ！ どうしたらいいの……！」

しばらく考えてあたしはいいことを思いついた！

「おはよ〜あんずって、なにその首……！」

さっそくクラスメイトの絵里につっこまれた。絵里はあたしの後ろの席なの。席が近くなって、最近仲良くなったんだ。あたしはイスの向きをくるりと変えて、答えた。

「大量に虫にさされたの」

そう、これがあたしの思いついた名案！ キスマークなんて虫さされと大して変らないと思っただけ。あたしって頭いいかも。

「なんだ、びっくりした〜。キスマークかと思っただじゃん」

「え……」

なんで、そうなるの。やっぱりキスマークに見えちゃうの？

「あれ〜？ まさかの凶星ですかい？ あんずちゃん？」

いたずらにあたしの顔をのぞきこんでくる絵里。

「／／／／／／」

昨日のことを思い出しちゃって、自分でも顔が真っ赤になってるのが分かる。

てか、否定くらいしろよあたし……！！

「うっそおー……！！」

絵里、お願いだからそつとしておいて。

「もうやつちやったの??」

「ふえ? ま、まさか!」

そこはちゃんと否定できる。そんなのしてないもん。

「このエロエロ星人めっ!」

そう言っつて絵里はニカつと笑うけど、それ結構きずつくよ。

なんであたしがエロエロ星人なのよ! それはこの大量のキスマイクつけやがった由良ちゃんに言うべきだつて! そのとき。

「おはよう、絵里、あんず」

「でたつ!」

思わずそう口走つてしまった!

目の前に真のエロエロ星人こと、由良ちゃんがいたんだもん。

「なにが出たの」

絵里がニヤニヤと言う。絵里ちゃん、そこはスルーしてほしかった……

「あたしも聞きたいな、あんず」

由良ちゃん、あなたが言う怖いです。目が笑つてないよ。

「え、エロエロ星人だよっ!」

あたしは捨てゼリフをはくと、屋上めがけて全力疾走。

だけどあたしは大きな間違いをしてしまった。

それは……逃げた先が屋上だったつてこと。

とりあえず屋上のドアに手をかける。いつもみたいに思いつきりドアを開けようとしたのに、

「あれ?」

何度やってみてもドアは開いてくれない。

一人でガチャガチャやつてると……やつの、エロエロ星人の声がありました。

「これ、使つ?」

人差し指にカギをひっかけてくるくる回しながら、階段を上がつ

てくる。

あたしのところまでくると器用に片手で鍵を開けて、あたしをもう片方の手で屋上へとうながした。

由良ちゃんの定位置まで連れて行かれる。じりじりと追い詰められて、それにあわせて少しづつ後ろに下がっていくと背中にフェンスがあたった。

後ろにはフェンス、前には由良ちゃん。

あたしはもう、完璧に袋のねずみ状態だ。

「あんず、キスマークくらいでエロいなんて言いすぎじゃない？」
由良ちゃんはそれはそれは恐ろしい悪魔スマイルをあたしに向ける。

「本当のエロいこと、おしえてあげる」

神様、あたしは身の危険を感じます！！！！

スキ、キライ、スキ…？（前書き）

遅くなりましたっ！ すみません><

スキ、キライ、スキ…？

「本当のエロいこと、教えてあげる」

由良ちゃんはあたしにキスした。

それはいつもより強引で、すごく熱いキス。

熱をもった舌をあたしの舌にからませる。深いキスの音だけが妙に響いて、なんだか恥ずかしい。けれど、それよりももっと……気持ちいい。

「ん…ふあっ…」

だから、ほんのちよっとだけあたしから舌を絡めてみたんだ。

そしたら由良ちゃんの口から初めて声がもれた。

「んあ……ふあ…あ…」

あたしとのキスで由良ちゃんも「気持ちいい」って思ってくれてるんだって思うと、素直に嬉しい。

「あ…ん……ふあ…アっ！」

思わず変な声を出しちゃったのは、由良ちゃんのせい！

だって、いきなりあたしの胸をさわったんだよ？ びっくりしたし、恥ずかしかったし……／＼

由良ちゃんは一度くちびるを離すと、口元を拭う。

「あんずとのキス、好きだよ？」

由良ちゃんが急にそんなことを口にする。その顔はなんだかいつもより色っぽくって……あっけにとられていると、む、胸に違和感がっ…！

由良ちゃん、いとも簡単にあたしのブラのホックを外しやがりました。

「っ！／＼／」

「どうしたの？ あんず」

何食わぬ顔で首をかしげる由良ちゃん。ううー分かってるくせに。

そういえば由良ちゃんも女の子だもんね、そりゃホックくらい簡単に外せるわけか。

「あの、手……」

そう、なんやかんやでまだ由良ちゃんの手はあたしの制服の中。

「ああ。ごめんね」

そう言ったからってつきり、もうやめてくれるのかと思ったのに……

「なっ／＼／ やめっ……」

「なに？ さわってほしかったんでしょ？」

そう、由良ちゃんはあたしの胸をやわやわと揉みはじめたの！

「ちよつと！ ゆ、由良ちゃん、そーゆーのはまだ早いっていうか……ね？」

あわてて由良ちゃんの手を押さえようとすると、それすらも拒まれる。女の子にしてはちよつと力が強すぎませんか？？

あ、やっぱり実は男の子でしたっていうあれでしょ！

そんなくだらないことを考えてたあたしの頭が一瞬で思考停止した。

「んっ！」

「もう、ココ固くなってよ？」

由良ちゃんはあたしの胸の頂点をデコピンするみたいに指ではじいたんだもん。

「あんず、感じちゃってるの？」

悪魔スマイルを浮かべながら指でいじり続ける。

「ふぁ……あう……う……ひつく……」

気持ちいいんだけどね、ちよつぱり痛くって、由良ちゃんがなんだか違う人みたたくって、もうわけが分からなくなって、涙があふれてきた。

「あんずっ！？ ……ごめんね。ちよつとやりすぎちゃったかな」

そう言っただけで由良ちゃんはあたしを抱きしめる。いじわるしても、最後には優しい由良ちゃんになるんだもん。だから、心のそこから由良ちゃんを拒めないし、嫌いにもなれないんだと思う。

好き…かな。なんて思いそうになっちゃうのもきつとそのせいだ。
「でもね、こうでもしないとあんずがどっかに行っちゃうんじゃないかかって心配だったの」

由良ちゃんのばか。そうやって悲しそうな顔されると、あたしは
由良ちゃんから離れられないじゃん。

「あたしはどこにも行かないよ」

そう言っすぎてぎゅっと由良ちゃんに抱きつくと、やっぱり悲しそうな顔で微笑んだ。

「変なこと言っでごめんね。あたしたち、別れよ？」

え？

思わずそう口にしてしまった。

「あんずだっで女の子どうし、なんて本当はイヤだったんでしょ？」
どうしてそんなこと言うの？

あたしを惚れさせるって言ったのは誰よ。それなのに、どうして？
たしかに、あたしは女の子どうしってことに抵抗がなかったと言
えば嘘になる。だけど、友達としてか恋人としてかは分からないけ
ど、あたしは由良ちゃんが好きだよ。

そう、ちゃんと口にして引き止めたらよかった。

由良ちゃんはそつとあたしの背中にまわした腕を解くと、どんど
んあたしから遠ざかっていく。

それなのにまた、あたしは声をかけることすら出来なかったんだ。
追いかけることすら、しなかった。

さつと乱れた制服をなおすと、あたしはすでにホームルームが始
まって静まり返った廊下をひとり歩いた。

向かった先は保健室。

なんだか、疲れちゃったし。今は由良ちゃんと同じ教室にいたく
ないって思ったから。

天秤と想い人

保健室に行ったけど、保険の先生の姿はどこにもなかった。代わりに『でかけています』なんてご丁寧に張り紙がされてあったから、あたしは遠慮なくベットを借りた。

しばらく眠れないまま横になってたらドアの開く音がして、どんな大きくなる足音。

「だれかいるのか？」

そんな声と同時にカーテンが勢いよく開けられる。

「……木下」

そこにはアイツ。あの変態教師こと篠原。

「具合でも悪いのか？」

「あ、はい……ちょっといろいろありまして……」

そう言ったとたん、頭の中が悲しそうな顔の由良ちゃんदैいっぱいになって涙がこみ上げてきた。

「う、うう……ひっく……」

ああ、コイツの前でだけは泣きたくなかったのに。でも涙があふれてたまらない。

「ちよ、おまつ！ どうしたんだよ」

「うう、なんでもないです……」

篠原はひとりであたふたして、それからそつとあたしを抱きしめる。

いつものあたしなら思いつきり突き飛ばすのにさ、今はただその優しさにすがりたかった。

「彼女となんかあったのか？」

「先生には関係ないです」

「話したらすつきりするかもしれないだろ？ まあ、話すも話さな

いもお前の自由だけだな」

そう言ってやさしく頭をぽんぽんってするのは、甘えていいって

こと？

「あのね、あたし由良ちゃんに嫌われちゃったかもしれない……」

「なのね、あたし由良ちゃんのこと引き止めて上げられなかった」
篠原はあたしの話をだまって聞いてくれた。

「じゃあさ、俺にしたら？ 俺ならお前を悲しませたりしない」

そう言っただけの優しいキス。初めての男の人とのキス。
触れるだけの優しいキス。初めての男の人とのキス。

「しのはら……？」

なんで、なんであたしなんかキスするの？

こんな弱つてるときにそんなことされたらあたし、自分の気持ちが分からなくなっちゃうよ。

「あんず」

そうあたしの耳元でつぶやくと、再び唇をふさがれる。

さつきよりも深く甘いキス。熱い舌が強引に浸入してきて、あたしの口の中で暴れまわる。

「ん……ふあ……あん」

思わず声が出ちゃうくらいにすごく気持ちいいよ。

やっぱり大人だけあつてすごく上手い。

でもね、思ってたんだ。なんか違うなって。あたしが本当に好きなキスはこれじゃないって。

しばらくして篠原の唇がはなれた。

「あんず……あとはお前が選べ」

息が上がっているあたしに篠原は低い声で呟いた。

「彼女と仲直りするか……」

あたしを抱きしめる力が少しだけ強くなった気がする。

「このまま俺に襲われるか」

さらに力強く抱きしめられる。なんだか恥ずかしくなって思わず視線をそらしちゃった。

あたしの中で天秤にかけられる二人。いつになく優しくしてくれる篠原と、あたしから離れていった由良ちゃん。

だけど、あたしが選ぶのは最初から決まってる。

気まぐれで、高飛車で、キス魔で、エロエロ星人なキミ。

「先生、あたし……行ってきます」

篠原はあたしの背中にまわした腕を解くと口を開いた。

「失敗したら俺んどこに来いよ？ いつでもなくさめてやる」

そう言っつてふつと鼻で笑う篠原に「ありがと」なんて小さく言っつて、あたしは保健室を飛び出した。

由良ちゃん、あたしやっぱり由良ちゃんがいいよ。

由良ちゃんのことが好きだよ。恋人の好きかなんて分からないけど、あたしがいま一番想っている人は由良ちゃんだよ。

お願いだから、あたしを嫌いにならないで。

天秤と想い人（後書き）

これは百合小説です（笑

感想とかお気に入り、本当にありがとうございました！ ーご期待に沿えるようこれからもがんばります！><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8969u/>

キス魔と指フェチの百合日記。

2011年7月29日03時24分発行